九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

王佑心著『〈文化翻訳〉で解く日本近現代文学 : 涙香・漱石・荷風・公房』

大場, 健司
九州大学大学院地球社会統合科学府 : 博士後期課程三年

https://doi.org/10.15017/1903748

出版情報：九大日文. 29, pp.109-112, 2017-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎書評

王佑心著『〈文化翻訳〉で解く日本近現代文学——涙香・漱石・荷風・公房——』

大場健司（Kenji Obaba）

筆者は国立台湾大学留学中（二〇一六年九月—二〇一七年一月）に、台湾における安部公房（一九二四—一九九三年）の受容に関する資料調査を行った。台湾の日本語文学研究ではこれまで、安部公房が研究対象となることは少なかったが、論文としては、黄翠娥「安部公房「砂の女」論」（『日本語日本文學』第三一号、二〇〇六年七月）や王佑心「安部公房「S・カルマ氏の犯罪」論——内在する翻訳の創造——」（『台灣日本語文學報』第三五期、二〇一四年六月）、邱雅芬・葉從容「中國大陸安部公房研究綜述」（『應用語文學報』第二号、二〇一五年一一月）などがある。研究書としては、「文化翻訳」（cultural translation）の視点から安部を扱った王佑心『〈文化翻訳〉で解く日本近現代文学——涙香、漱石、荷風、公房——』（致良出版社、二〇一四年九月）が出版されており、今回の書評では、この日本語の研究書を取り上げることで、安部公房が台湾でどのように論じられているかの一例を提示したい。

これまでの安部公房研究では、安部が一九九三年一月に亡くなり、『安部公房全集』全三〇巻（新潮社、一九九七年一月—二〇〇九年三月）が刊行されたこともあり、二〇〇〇年以降に研究が活発化した。そのため、夏目漱石（一八六七—一九一六年）や宮沢賢治（一八九六—一九三三年）のような従来のキャノンと比べると、作家の伝記的研究よりも、ポストコロニアリズム（postcolonialism）やメディア研究（media studies）の視点から取り上げられることが多かった。例えば、「アヴァンギャルド」（波潟剛）、「芸術運動」（鳥羽耕史）、「ＳＦ」（Christopher Bolton）、「植民地」（呉美姃）、「都市」（苅部直）、「映画」（友田義行）、「マルチ・メディア」（木村陽子）、「ネーション批判」（Richard F. Calichman）、「水の表象」（李先胤）、「ナショナリズム」（坂堅太）といった視点から論じられており、筆者は「比較文学」（comparative literature）や「アナキズム」（anarchism）の視点から研究を行っている。

今回、取り上げる王佑心『〈文化翻訳〉で解く日本近現代文学』では、「文化翻訳」がテーマとされている。このテーマは、「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」台湾大会（輔仁大学、二〇一五年一一月一四—一五日）、及びその国際誌『跨境 日本語文学研究』第三号（高麗大学校 GLOBAL 日本研究院、二〇一六年六月）の特集「文化翻訳／翻訳文化」においても扱われており、近年の日本語文学研究においても重要なキー・タームになっている。

「翻訳学」（translation studies）はもともと、言語学や比較文学において研究されてきた学問分野だったが、現在では「翻訳」（translation）という言葉は、「オリジナル」（original）の言語を他の言語に「翻訳」するというような単純な意味では捉えられてはいない。ジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）やポール

・ド・マン（Paul de Man, 1919-1983）らのポスト構造主義（Post-structuralism）では、このような「オリジナル」／「翻訳」の二項対立は内部から破壊され、「オリジナル」の不可能性が示される。これを踏まえ、異文化間の「文化翻訳」について、レイ・チョウ（周蕾、Rey Chow）が『プリミティヴへの情熱――中国・女性・映画』（*Primitive Passions: Visuality, Sexuality, Ethnography, and Contemporary Chinese Cinema*, 1995）において、「複数文化間の翻訳は言語という段階において、西洋が東洋を翻訳したり、あるいは東洋が西洋を翻訳したりすることに限られるわけではない」、「文化間の翻訳は、伝統から近代へ、文学から視覚性へ、エリート学者文化から大衆文化へ、ネイティヴから外国のもの、異質なものから土着のものへ、などなどの変化を含む幅広い行為全体を包含するものだからである」（「民族誌としての映画、もしくは、ポストコロニアル世界における複数文化間の翻訳」（『プリミティヴへの情熱――中国・女性・映画』本橋哲也、吉原ゆかり訳、青土社、一九九九年七月）二八五頁）と述べているように、「文化翻訳」では映画やテレビといった他メディアや大衆文化との関係が重要になってくる。

『〈文化翻訳〉で解く日本近現代文学』では、このような「翻訳学」の研究史を踏まえた上で、黒岩涙香（一八六二―一九二〇年）や、夏目漱石、永井荷風（一八七九―一九五九年）、安部公房といった作家と「翻訳」の問題が論じられている。序章「〈文化翻訳〉をいかに問題とすべきか」では、水村美苗（一九五一年―）の『私小説 from left to right』（新潮社、一九九五年九月）の翻訳論を参照しながら、言語の「翻訳不可能性」の問題から、異質な「他者」の問題が示されている。そして、「他者」の言語や文化を自分の言語や文化に取り入れる「文化翻訳」として、黒岩涙香による翻案、夏目漱石の留学、永井荷風の外遊、安部公房の文化的越境が提示されている。

第一章「メタファーとしての「翻訳」」では、ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin, 1892-1940）からホミ・バーバ（Homi Bhabha, 1949-）に至る翻訳論が概説されたのちに、日本における「翻訳」をめぐる言説の歴史が論じられている。具体的にはまず、ベンヤミン「翻訳者の使命」（"Die Aufgabe des Übersetzers," 1923）において、翻訳が単なる意味の伝達とは見なされず、「言語の他者性」と「差異の意味付け」をとおしてテクスト内の新たな意味を産出させる行為であるとされていたことが解説される。次に、バーバの翻訳論が参照され、「文化翻訳」が「異種混交的な意味の場」において「言語の外来性」＝「翻訳不可能性」を明らかにするものであることが示されている。更に、このような翻訳の研究史を踏まえた上で、日本近現代文学における西洋文学の翻訳の問題が扱われている。例えば、坪内逍遥（一八五九―一九三五年）／森田思軒（一八六一―一八九七年）の翻訳における「目標言語重視」（和文脈）／「起点言語重視」（欧文脈）の差異などが論じられている。

第二章「〈文化翻訳〉の出発――起源としての探偵物語――」では、新聞『萬朝報』（一八九二年一一月一日―一九四〇年一〇月一日）を創刊し、多数の翻訳探偵小説を掲載した黒岩涙香が論じられ

ている。ここで扱われているのは、涙香の翻訳小説ではなく、むしろ創作小説『無惨』（小説館、一八八九年九月）における「文化翻訳」の問題である。この探偵小説では、ある殺人事件を二人の巡査、谷間田と大鞘が捜査するという物語になっている。捜査では、谷間田が「証言」を重視する江戸時代の町奉行所で用いられるような調査方法をとっているのに対し、大鞘は西洋の探偵小説のように、顕微鏡を用いた科学的な調査を行う。そして、この顕微鏡は、情報の断片を一つの物語へと「翻訳」していく。更に、ここでは「読者」もまた、事件の「解明」＝「翻訳」を行う存在として位置づけられるという。

第三章「翻訳者の姿勢と立ち位置（ポジショナリティ）への注視」で扱われるのは、夏目漱石の翻訳論と同時代の翻訳をめぐる言説との関係性である。同時代では、二葉亭四迷（一八六四―一九〇九年）がロシア文学の原文に忠実な逐語的な「起点言語重視」の翻訳を行っていたが、これに対し、森鷗外（一八六二―一九二二年）は逐語訳に満足せず「目標言語重視」の日本語で翻訳した。そのような翻訳をめぐる言説が生成されていた中で、ロンドン留学中にウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）の研究者ウィリアム・クレイグ（William Craig, 1843-1906）から学んだ漱石は、坪内逍遥（一八五九―一九三五年）による『ハムレット』（*Hamlet*, 1601）の日本語訳を批判している。それは、逍遥がシェイクスピアの戯曲を「普遍的なもの」と見なしたのとは違い、漱石の「立ち位置」（positionality）が、西洋の文学史を「普遍的なもの」とは見なさないものであり、テクストを単数的な意味には還元しない翻訳観を有していたからだという。

第四章「〈文化翻訳〉の越境1――外遊者の風景――」では、永井荷風『あめりか物語』（博文館、一九〇八年八月）が論じられている。かつてホミ・バーバが「「中間」の移民文化とマイノリティ」を「文化の翻訳不可能性」と見なし、「移民文化は文化の領有という問題を、「内容の完全な伝播」という同化主義者の夢（人種差別主義者の悪夢）を越えて、文化的差異との同一化にはつきものの、分裂と異種混淆のアンビヴァレントな過程へと向かわせるのである」（「新しさはいかに世界に登場するか――ポストモダンの空間、ポストコロニアルな時間、文化翻訳の試練」、『文化の場所――ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也、正木恒夫、外岡尚美、阪元留美訳、法政大学出版局、二〇〇五年二月）三七四―三七五頁）と述べたように、この章ではアメリカの移民の問題が扱われている。周知のように、永井荷風は一九〇三年九月から一九〇七年七月までアメリカを外遊し、その体験をもとにした『あめりか物語』を一九〇八年八月に発表している。一般的に、明治の知識人が留学や外遊をするのは、当時の「中心」である欧米であったが、荷風はその「中心」の内部に「周縁」を見いだしていく。具体的には、『あめりか物語』では都市空間の「風景」を描く際に、当時のコンテクストにおいて「周縁」に位置づけられた黒人や移民、労働者が「中心」／「周縁」を越えて移動していく様子が描かれているのだという。このような「風景」＝「地図」は、外遊者である主人公の「文化翻訳」的なまなざしをとおして発見されたものなのだった。

第五章「〈文化翻訳〉の越境2――内在する翻訳の創造――」では、安部公房「S・カルマ氏の犯罪」（『近代文学』一九五一年二月号）が扱われている。「S・カルマ氏の犯罪」では、主人公の「名前」の喪失や「壁」への変身が、有機物／無機物が混じり合う異種混淆的な空間において行われており、この章ではそのような「変身」が「文化翻訳」として見なされている。例えば、主人公が「名前」を失うことが自己の「翻訳不可能性」として見なされている。更に、作品内で「カルマ」という名前が「アルテ」や「アルマ」、「アクマ」に置き換えられる言葉遊びの場面については、「等価翻訳の不可能性」が見いだされている。また、主人公が「世界の果て」に逃走し「壁」に変身する場面では、「人間の言語」から「言語なき言語」への「翻訳」が行なわれているという。ここに、異なる他者に対して自己を「翻訳」する「文化翻訳」が見いだされている。

ここで私見を述べるならば、「S・カルマ氏の犯罪」における「名前」の喪失とは、実存主義（existentialism）における「〜である」アイデンティティ（identity）としての「本質」（essence）の喪失なのであり、この章の文化翻訳論を参照することで、実存主義と文化翻訳の関係性という新たな視点が提示されるのではないだろうか。また、この小説における言葉遊びについては、安部が影響を受けたルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832-1898）の『不思議の国のアリス』（*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865）における言葉遊びを、ジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze, 1925-1995）の『意味の論理学』（*Logique du sens*, 1969）におけるルイス・キャロル論を媒介にして対比し、その「文化翻訳」を論じても面白いだろう。このように、この研究書で論じられた「文化翻訳」という視点を参照することで、テクストの新たな読解可能性が提示されるのだ。

この日本語の研究書が台湾で刊行されることで、台湾における日本語文学研究に「文化翻訳」という新たな視点が紹介されたのではないだろうか。ここから、日本統治期台湾の日本語文学をポストコロニアリズムのみならず「文化翻訳」から論じる可能性も提示されるだろう。日本に留学した台湾人作家たちの作品もまた、格好の「文化翻訳」の例である。さらに、レイ・チョウが論じたような大衆文化やメディア間の「文化翻訳」も重要になってくるのではないだろうか。

最後に、この研究書の目次を掲載しておく。

○目次

序章　「〈文化翻訳〉をいかに問題とすべきか」
第一章「メタファーとしての「翻訳」」
第二章「〈文化翻訳〉の出発――起源としての探偵物語――」
第三章「翻訳者の姿勢と立ち位置（ポジショナリティ）への注視」
第四章「〈文化翻訳〉の越境1――外遊者の風景――」
第五章「〈文化翻訳〉の越境2――内在する翻訳の創造――」
終章　「〈文化翻訳〉に見た日本近現代文学の創造力」

（二〇一四年九月　台北・致良出版社　二〇九頁　二二〇元）

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程三年）